

現地報告

コソヴォにおけるセルビア正教会修道院の現状

**Present state and obstacles of cultural properties in post-conflict Kosovo**

キーワード：コソヴォ，正教会，修道院，文化遺産，保存

**Key words:** Kosovo, Orthodox church, monastery, cultural property, conservation

日高 翠 HIDAKA Midori

東京芸術大学大学院美術研究科 特別研究員 (PD)

コソヴォ<sup>1</sup>における，セルビア正教会修道院の現状について報告する。

中世後期，オスマン帝国の版図拡大とともに，それまで正教会美術の一大中心地であったテッサロニキから現在のコソヴォ地域に多くの画工が移住し，セルビア王国ネマニッチ朝の歴代君主のもとで壁画装飾を代表とする多くの鮮やかな芸術作品を残した。これら重要作品を擁する修道院・教会堂のうち4つが「コソヴォの中世建造物群<sup>2</sup>」としてユネスコ世界文化遺産に登録されている。筆者は，壁画の内部構造，使用材料，制作技法の分析のため，2011年からコソヴォを定期的に訪れ，2014年よりセルビア国立科学芸術アカデミーおよびセルビア政府歴史的建造物保護研究所（以下，セルビア文化財研究所）において研究を進めている。本稿は，筆者が2015年中に，コソヴォの4つの世界遺産と15の同時代作例を訪問した際，修道院関係者，文化財関係者，地元住民との交流・意見交換を通して実感した紛争後の文化遺産の現状と課題に関する考察である。

かつては民族間の抗争や宗教間の対立が目立って報道されたコソヴォだが，近年は外国人観光客も増え，紛争終結から16年経った今，危険地域としての認識は薄まりつつある。日本人観光客も増加傾向にあり，特に世界遺産構成資産である正教会修道院群には毎週のように団体客が訪れる。荘厳な静寂に包まれた修道院群や，笑顔と活気にあふれたトルコの街並みを思わせる土産物・レストラン街を見て回ると，確かに紛争後の平和構築は順調に進んでいるように感じられるが，実際に現地に一定期間滞在し，紛争とその前後の混乱を経験してきた当事者と接すると，少し異なった側面が見えてくる。

2015年，欧州ではコソヴォのユネスコ加盟問題に関する動向が盛んに報道された。ユネスコ加盟と将来的な国連加盟による独立国としての国際的認知を目指すコソヴォと，コソヴォは自国領

<sup>1</sup> 本文における「コソヴォ」は，2008年日本国が独立を承認した「コソヴォ共和国」と同義だが，本文で深く関わるセルビアが独立を否認していることを考慮し，本文では単に「コソヴォ」と呼称する。

<sup>2</sup> コソヴォは2008年にセルビアからの独立を宣言したが，世界遺産条約未締結であり，「コソヴォの中世建造物群」はセルビア共和国の世界遺産として記載されている。

土であるとして独立を認めないセルビアとの間で意見が対立、国際社会の判断も賛否に分かれた。それまで少なくとも表面的には鎮静化していた、セルビア人とアルバニア人、正教徒とイスラム教徒の間の対立が、加盟の賛否を巡って再び高まり、筆者はコソヴォおよび周辺地域に滞在しながら、その根強い相互不信を改めて実感した<sup>3</sup>。軍事的手法であったとはいえ前世紀のうちに和平合意をみたはずの両勢力の対立は、解けるばかりか、大規模ではないにしろ、一方が態度を硬化させれば他方が反発するという悪循環を抜けられずにいるようである。ユネスコ加盟事案を巡り、セルビア国内およびコソヴォに住むセルビア人は口を揃えて、「(コソヴォに残る)セルビアの文化的産物が抹消される危機」を訴え、将来的なコソヴォ奪回への望みをつなぐため、コソヴォに複数の点のようにして残されたセルビア正教会の修道院、教会堂を死守するという固い態度を示した。

一方、コソヴォで人口の大半を占めるアルバニア人イスラム教徒に話を聞くと、ユネスコ加盟申請について直接的発言は意外と少なかった。しかし、進まない貧困削減、上昇する失業率<sup>4</sup>といった現在の不安定な社会問題は、コソヴォが名実ともに独立国とならない限り改善されないだろうという思いから、自治政府が国際社会の一員となるための足掛かりとして進めてきた政策に大きな反発はない。むしろ、かつて争った相手であり、もっとも近くでコソヴォ独立に猛反対するセルビアへの敵対心が、加盟問題を火種として改めて燃え始めたのでは、という不安な印象が彼らの言葉と態度に感じられた。

イスラム教徒のこうしたストレスは、時に、紛争後のコソヴォで圧倒的な少数派となったセルビア人が心の拠所とする正教会施設の破壊行為や嫌がらせという形で発散された。コソヴォにおけるセルビア正教会施設の3分の1にあたる150以上の教会堂が、紛争終結の後に全面的、あるいは部分的に破壊されている。以下、事例として世界遺産構成資産となっている4つの修道院を取り上げ、地域紛争と文化遺産保護に関する問題提起と考察を進めることとしたい。

## 1. デチャニ修道院

コソヴォ西部にあるデチャニ修道院は、セルビア正教会の重要拠点であり、そのために、これまで常に一部のイスラム教徒による破壊、暴力行為の対象となってきた。砂岩ブロックを積み上げた重厚にして背の高い付属教会堂は、堂内にバルカン最大規模の壁画装飾を擁する。なかでも、横たわる生神女を扉口上の半円タンパンの中に配した生神女就寝図の図像と手法は独創的で、8

<sup>3</sup> コソヴォにおける対立は、セルビア人とアルバニア人が領有権を主張したことから始まっている。セルビア人のほとんどが正教徒であり、アルバニア人の半数以上がイスラム教徒であることから、正教徒対イスラム教徒という対立の構図が描かれるようになった。しかし、アルバニア人の宗教的帰属は一つではない。オスマン帝国時代にその多くがイスラム教へと改宗した影響でその半数以上がイスラム教徒だが、カトリック教徒や正教徒もいれば、アルバニア本国には無宗教者も多い。アルバニアを旅すると、内陸地方ではモスクよりも教会堂を目することが多く、アルバニア＝イスラム教という短絡的思考は成り立たないことが分かる。

<sup>4</sup> 貧困率29.7%。全体失業率35.1%、若年失業率60.2%(United Nations Development Programme 2015調べ)。

年の建築期間に対して壁画制作期間は 20 年にもわたるため、堂内壁面に全体を通じて異なる複数の技法が観察される点で、学術的にも貴重な事例である。修道院は、周辺耕作地を含む豊かな自然環境を誇る広い緩衝地帯とともにユネスコ世界文化遺産に登録されている<sup>5</sup>。

デチャニの町の住民自体は皆イスラム教徒のアルバニア人で、在住セルビア人は、紛争に突入する 1996

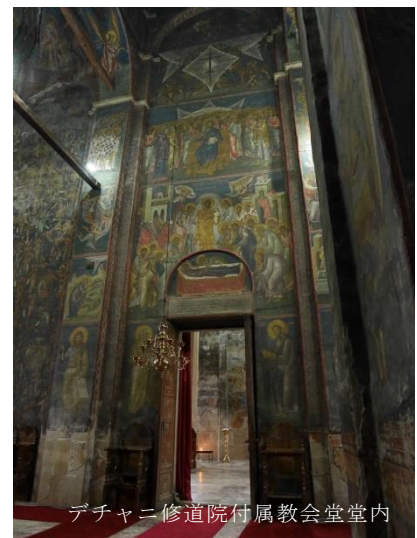


デチャニ修道院附属教会堂

年以前に現地に住む年代の女性が一人いるのみである。周囲をすべてアルバニア人イスラム教徒に囲まれ、紛争後度々、象徴的存在として両勢力の衝突の的となってきたデチャニ修道院には、修道院の敷地所有権を主張する狂信的なイスラム教徒による落書きや投石などの嫌がらせが今でも絶えない。町から修道院へのアプローチには大きなテトラブロックが並べられ、院内への入口脇には KFOR<sup>6</sup>イタリア軍やスロベニア軍が常駐し、コソヴォ領内の正教会施設としては例外的に厳重に警備されている。コソヴォの他の修道院が、警備体制を年々緩めていくのに対し、デチャニ修道院の警備体制は紛争直後から大きく変わっていない。

修道院を敵対視する者の多くは、実は紛争経験者ではなく、紛争以後に育った若者であるという事実にも注目しなければならない。コソヴォに住む非正教徒の若者にとって、セルビアが管轄し、セルビアの通信環境下であり、高い塀に囲まれて中を窺い知ることができない修道院は、得体の知れない脅威に思えるという。年配の世代は、かつて共存した経験を持ち、のちに紛争を経て、互いに大きな犠牲を払ったことを実感しているため、今では柔軟な態度をもつが、誤った歴史認識に基づいた教育を受けた若い世代は、偏った思想を抱き、短絡的にそれを行動に移す傾向がある。教育、特に平和のための教育、共存のための持続的教育が必要であることを強く感じる。

デチャニ近隣の小学校では、デチャニ修道院の創建者であるステファン＝ウロシュ 3 世を史実に反してアルバニア国王であると教える事例もあり、これには、たまたま授業参観に訪れたアメリカ合衆国大使から批判があった。しかし、この誤った教育はその後改善されることなく放任されている。乱れた教育と秩序のなかで育ち、アイデンティ



デチャニ修道院附属教会堂内

<sup>5</sup> 2004 年に「デチャニ修道院」として単独でユネスコ世界文化遺産に登録されたのち、2006 年、ペーチ主教座修道院、グラチャニツァ修道院、レヴィシヤ生神女教会堂を含めて拡大登録されると同時に、コソヴォの政情不安を原因として危機遺産にも記載された。

<sup>6</sup> KFOR (Kosovo Force, コソヴォ治安維持部隊) は、NATO (北大西洋条約機構) および関係国により、コソヴォの治安維持を目的として編成された国際安全保障部隊である。関係各国は、地理的分 (中央部、北部、東部、南西部) で担当が割り振られている。

ティの獲得もしくは維持に強く固執する若者たちの間には、占領された修道院を取り返そうという偏った正義感が高まり、アルバニア独立記念日（11月28日）など、国を意識する記念日には母国帰属への高揚心から些細な事件や小競り合いから彼らが一気に暴徒化する恐れがある。

デチャニ修道院のサヴァ・ヤニッチ院長はじめ修道院関係者らは、2000年以降、デチャニの町を一度も訪れていない。どこで出会うかもわからない熱狂的イスラム教徒の反感を避けるため、修道士が聖職衣で街に出ることは避け、信者や修道院で働く非聖職者である者がペーチカプリズレンまで出向き、ときにはスロベニア人の振りなどして、日常の所用を足さなければならないという。コソヴォにおける対立の構図の外にいて、危害の及ぶ恐れのない日本人である筆者が、彼らの言う脅威を肌で感じることはできないのだが、サヴァ院長はコソヴォの現状を、「危険因子があちこちに充満しており、常に戦争の一手手前にいる状態」と表現する。双方に溜まる大小のストレスは、一つの小さなきっかけで大爆発を起こし、新たな紛争に発展しかねない。

デチャニ修道院内で働く者のなかには、ベオグラードおよびセルビア各地から派遣されてくる者もいる。セルビア文化財研究所からデチャニ修道院とペーチ主教座修道院に派遣されている、各2〜3名の保存修復技術者もそうした「異郷派遣者」である。1〜4か月コソヴォに滞在し、イコンや古文書の修復を行っている。このコソヴォでの勤務は、給料が通常の数倍になるうえ危険手当が出るため、経済状況の良くないセルビアで日給20ユーロに満たない最低賃金の労働環境に甘んじる修復家としては好条件のように思えるが、実際は、希望者がおらずに人材が不足している。いつ再燃するかもしれない紛争の恐れから、コソヴォでの長期勤務は敬遠され、たまたま現地滞在を経験してもそれは初回限りで、再びコソヴォの仕事を受けた者は今のところいない。従って、修復作業は途切れ、仕事の質と継続性を保つことも困難になっている。これは、コソヴォの宗教建築、宗教美術の保存修復にとって大きな問題である。

デチャニ修道院は、コソヴォ地域で唯一、1327年の創建以来一度も修道生活が途絶えたことのない修道院である。オスマン帝国時代や近年の紛争時代に破壊されたり、修道士がいなくなったことで荒廃に追いやられたりした修道院が数知れないなか、デチャニ修道院は、攻撃を受ける度に周壁や居住棟の補修、再建を繰り返しながら、修道院としての機能を絶やさずに保持してきた。近年の遺産概念を用いれば、これは「リビング・ヘリテージ」であり、その伝統は貴重な文化的、宗教的遺産として守られるべきである。



デチャニ修道院付属教会堂内

コソヴォ紛争後、修道院と付属教会堂をただの展示物とさせないために、修道士らは積極的に活動している。聖務日課に加え、家事、農作業のほか、積極的に外国語や歴史、芸術を学び、修道院で製造するワインや化粧品の高品質向上にも意欲的に励んでいる。サヴァ院長も頻りに国際

メディアに登場し、修道院のプロモーションを行い、また、付属教会堂の保存活用についても、イタリアやフランス、オーストリアなどの外国企業とやりとりをし、堂内環境の保全・改善に向けて取り組んでいる。

こうした自発的かつ意欲的な活動に対しては、近視眼的な政治判断からではなく、それを越えた長期的かつ国際的文化支援の枠組みが必要である。

## 2. ペーチ主教座修道院

デチャニから 15 キロ程南へ行った都市ペーチ（アルバニア語ではペーヤ）の外れにも、世界文化遺産に登録されている主教座修道院がある。セルビア王国、オスマン帝国、ハンガリー＝オーストリア帝国、アルバニア共和国、ユーゴスラヴィア連邦などの統治を経験し、そのたびに町は大きく変化してきたというが、現在のペーチは、外国人も比較的多く住み、開放的な雰囲気を持ち、セルビア人にとってもコソヴォ内でもっとも治安の良い都市と言われる。都市の総人口に占めるセルビア人の割合は 0.3%に過ぎないが、コソヴォ内では最大人数が暮らしている。

トルコ風の低い屋根の細く入り組んだ通りが街中に残り魅力的だが、この数年でホテルやカフェ、公園が改装・整備され、かつての歴史景観は急速に近代化し景観保存の視点からは残念な過程が進んでいる。この町がオスマントルコの支配下に入った直後の 15 世紀に建造されたモスクは、街の中心部に位置し、金曜日にはモスクに入りきらないほどの人が礼拝に訪れる。この近隣は人々の生活と宗教の場であると同時に、観光地区ともなっている。隣接する衣料品、宝飾品、土産物店は、コソヴォの他の都市同様にほとんどが中国製品であり、地元の産物を扱う店は見当たらないのだが、そうしたマーケットの雑踏と喧噪に囲まれ、窮屈そうに見えるモスクであるが、トルコ都市の特徴を残す貴重な都市空間がこの一帯にはかろうじて保たれている。

ペーチ主教座修道院は、人々が行き交う賑やかな街の中心部から 3.5 キロの山に囲まれた静かな自然の中にある女子修道院である。NATO 軍ではなくセルビア人のコソヴォ警察が警備しており、手動のバーを上下する警備隊も防弾チョッキやライフル



ペーチの街



ペーチ主教座修道院付属教会堂



聖生神女聖堂

銃を装備していないため、デチャニで感じるような緊迫感は受けない。院内は初期キリスト教時代の遺構を含めて美しく整備されており、音声ガイドや各国語のガイドブックも充実している。修道院は 1320 年頃の創建だが、付属教会堂は、ネマニッチ朝時代に装飾や増築が行われて現在の姿になった。

その構造は複雑で、もっとも古い聖使徒聖堂を中心として、北に聖ディミトリエ聖堂、南に生神女聖堂が配され、3 聖堂はそれぞれの入口が南北に長いナルテクスで内部がつながっている。生神女聖堂の南には聖ニコラ聖堂があるが、構造的には接しているものの入口は独立している。このように入り組んだ建築構造をもつ教会堂は、外壁全体が酸化鉄系の深赤色で塗られており、印象的である。この色彩がペーチ主教座修道院の特徴ともなっているが、これは数年前にセルビア文化財研究所が実施した「修復」の結果であり、それ以前は壁石模様の素朴にして美しい外壁をもっていた。外壁を深赤色で装飾する伝統は確かにギリシャ・ビザンティン様式の教会堂で知られているが、この教会堂もそうであったと確定できる根拠はなく、十分な調査と学術的分析なしに大規模な外観の変更作業が施されたことは否めない。また、この教会堂では、各会堂の隣接部分を中心とした雨水の浸透や塩の析出、西側の一部支柱の外傾など、目に見える劣化と変形が複数確認される。小規模な地震がしばしば起こる当地における構造面の問題は深刻であり、本格的な構造強化・修復作業が求められる。

### 3. レヴィシヤ生神女教会堂

ペーチから南に 70 キロほど行くと、コソヴォ第二の都市プリズレンがある。ここは、コソヴォ紛争の激戦の名残が未だに感じられる都市であり、2006 年に世界文化遺産に登録されたレヴィシヤ生神女教会堂のほか、セルビアの重要文化財に指定される教会堂や中世に創建された教会堂施設が残されている。

レヴィシヤ生神女教会堂は、14 世紀初頭に創建され、オスマン帝国統治下で 250 年間モスクとして使用されたのち 1951 年に教会堂に戻された歴史をもつ。堂内には、この複雑な歴史を想起させるアラビア文字の装飾や構造変更の跡が確認できる。

デチャニ修道院同様、コソヴォ紛争終結後も、アルバニア人イスラム教徒による投石、落書きや略奪などの被害に遭っていたが、2004 年にコソヴォ全土で起こった大規模な反セルビア暴動時に、



レヴィシヤ生神女教会堂



レヴィシヤ生神女教会堂内

堂内で古タイヤを燃やすなどの行為により教会堂消失の危険にさらされた。それまでも、多くの正教会施設が報復行動による被害を受けていたものの、難民問題のように大きく報道されることはなかった。数日間で甚大な人的、物的被害を出したコソヴォ暴動は国際社会に衝撃を与え、なかでも真っ黒に焦げあがったリエヴィンシャ生神女教会堂は、非文化的暴力の象徴として大きく報道され、紛争終結が表面的でしかなかったことを示すこととなった。暴動の2年後の2006年にリエヴィンシャ生神女教会堂はユネスコ世界文化遺産に登録されるが、同時に危機遺産にも名を連ねた。

煤で覆われた壁画は、ユネスコの支援とイタリアの技術協力により修復が行われたが、堂内とエクソナルテックス南側の作業は完了したものの、他の壁画については未だ本格修復の予定は立っていない。紛争とその後の暴動で全壊を免れた他の教会堂では、この数年で警備が少しずつ緩和され、一部は限定的でありながらも一般公開が実現したのに対し、リエヴィンシャは今日も有刺鉄線を幾重にも重ねた鉄柵で囲われ、一般には開かれていない。プリズレンの町中には、修道施設を持たない教会堂が多く、郊外にあった聖アルハンゲリ修道院もイスラム教徒の暴動によって全壊し閉鎖されていたため、プリズレンに在住する宗教関係者の数はそもそも少なかった。プリズレンは、中世の教会堂が集中して残る重要都市であるが、紛争後の復興活動は距離を置いた修道院からされる遠隔的、短期的な試みにすぎなかった。

しかしながら、最近2~3年でこの状況は大きく変わり始めている。北欧やドイツからの経済的援助に加えて、宗教関係者らが現地で直接、長く閉鎖状態にあったプリズレンの正教会施設の再開活動に関わり始めたからである。2013年に、ソポチャニ修道院長であったミハイロ司教が聖アルハンゲリ修道院長に着任すると、聖ジョルジャ教会堂、救世主教会堂をはじめとした紛争後の暴動で甚大な被害を受けた正教会教会堂の修復・一般公開が



プリズレンの街

実現し、これまでコソヴォ警察が駐在するのみであったリエヴィンシャ生神女教会堂にも、2015年にベオグラードから司祭が派遣され教会脇に居住するようになった。それまで聖ジョルジャ教会堂で行われていた日曜礼拝が、時折リエヴィンシャ生神女教会堂で行われるようになり、政情不安、治安悪化の影響でコソヴォを去ったセルビア正教徒の呼び戻しに貢献している。

同じくセルビア人のコソヴォ回帰に一役買っているのが、1871年創立のセルビア正教会、聖キリル&メトディオス神学校である。プリズレン中心部にあり、オスマン帝国との国境地域に設けられた最初の正教会神学校としての歴史をもつ。

この学校は過去、第一次大戦中に2年間、第二次大戦中に4年間閉鎖状態にあったが、先の紛争では13年もの長い間閉鎖されており、その間に起きた暴動によって校舎が消失した。校舎消失

後、ロシア正教会、ノルウェー<sup>7</sup>、EUから継続的な経済援助があり、8年かかったものの2012年には学校運営の再開が実現した。校舎ははまだ再建・整備途中だが、全5学年の生徒と教師合わせて80名が在籍している。アルバニア人を含む生徒の多くは、近隣村落の出身で十分な初等教育を受けていないために、学校では神学だけでなくアルバニア語や一般常識から教えているという。インタビューに答えてくれた校長によれば、過去、プリズレンに住むセルビア人正教徒にとってもっとも情勢が緊迫していたのは2007～2008年であり、学校関係者が路上で襲われる殺人事件もあったという。今もまだ生徒らの外出は厳しく制限されているが、ここ5～6年で街中の治安は大きく改善し、日中は学校関係者、教会関係者が聖職衣のまま街中を歩くことができるまでになっている。

プリズレンでは、神学校の再建のほか、閉鎖されていた教会堂施設の修復・公開や、荒廃したセルビア人住宅の再建も進んでおり、わずかながら、コソヴォから逃げていたセルビア人も戻りつつある。若い世代の相互理解も、デチャニや他の都市と比較すると格段に進んでいることから、紛争後の平和構築と異民族共存のモデルケースとなる可能性をもっとも秘めた都市と言える。

#### 4. グラチャニツァ修道院

コソヴォの世界文化遺産のなかで唯一、首都ブリシュティナのある東部地域に位置するのがグラチャニツァ修道院である。住宅地から離れた場所に立地することの多い他の修道院と異なり、この修道院はグラチャニツァ村の中心部にある。また、10,000人程度のこの村の人口のうち9割近くがセルビア人であり正教徒である点で、コソヴォの都市として例外的であり、街中ではNATO軍、UN、EU関係者を目にする機会が非常に多い。



グラチャニツァ修道院附属教会堂

セルビア人の人口比が多い町に位置するグラチャニツァ修道院は、コソヴォ内では、礼拝者、観光客のもっとも多い教会堂で、決して狭くはない堂内が訪問者でいっぱいになることも珍しくない。1321年に、初期キリスト教時代の聖堂址にビザンティン様式の強い影響を受けて、複雑なヴォールト架構をもつ現在の付属教会堂が造営された。堂内には、複数の異なる技術レベルで作られた壁画装飾が施されており、制作過程や技術的工夫を観察できる点で学術的に重要である。14世紀末にナルテクスより一段低い位置に増築された玄関廊では、16世紀に入り口左右のアーチが煉瓦で塞がれたが、現在そのアーチは開口部として復原され、ガラスで覆われている。ガラス

<sup>7</sup> 修道院の整備や神学校の再建工事は、コソヴォ政府が定める入札制度により、資金の提供だけでなくその後の実施プロセスにも関与する必要があるため、業者の選定自体に時間がかかる傾向がある。神学校の再建事業は、デチャニ修道院への援助実績のあるノルウェー主導のもと進められている。プリズレンのセルビア正教会関係施設に対する外国からの経済支援は1件であるのに対し、アルバニア関係施設には40件の援助が実現している。



の嵌め込み工事により、オリジナルのアーチのイントラドス（内弧面）石材が物理的に傷付けられ、隙間に雨水や虫が溜まっている現状は残念である。しかし、玄関廊に外光を取り入れる建造当初の設計に近づける意図には成功しており、また、ガラス面は堂内やポーチの壁面に直接雨水がかかることをかろうじて防ぎ、この部分の壁画劣化の防止に幾分かの貢献をしている。

付属教会堂はこれまで、オスマン軍による攻撃によってナルテクスが破壊され、それに続くコソヴォの戦い（1389年）の大敗によって構造的に大きな被害を受けたことで、中世の間にすでに再建、修復、修繕が繰り返されてきたが、コソヴォ紛争では幸いにも甚大な被害を受けることはなかった。紛争後、ユネスコが教会堂全体の大規模な保存修復事業を立ち上げる方針でコソヴォ自治州政府に働きかけ、入札が行われたが、事業が開始されないまま現在に至っている。基本方針を提示したユネスコの放任と静観主義には問題があると感じる。

ユネスコ世界文化遺産に登録されているセルビア正教会施設は、先述した「コソヴォの中世建造物群」のほかに、セルビア領内に、ソポチャニ修道院、聖ペトル教会堂、ジュルジェヴィ・ストゥポヴィ修道院を構成資産とする「スタリ・ラスとソポチャニ」、ストゥデニツァ修道院単独を構成資産とする「ストゥデニツァ修道院」がある。ストゥデニツァ修道院はコソヴォとの境界から少し離れたセルビア中部にあるが、ソポチャニ修道院、聖ペトル教会堂、ジュ



ジュルジェヴィ・ストゥポヴィ修道院付属教会堂

ルジェヴィ・ストゥポヴィ修道院の3資産はセルビア南西部、コソヴォ境界から程近くに位置し、最寄りには2組の狂信的なイスラム教団体が活動拠点とする都市ノヴィ・パザールがある。特に聖ペトル教会堂とジュルジェヴィ・ストゥポヴィ修道院は市街から近く、修道士が在住する後者は、イスラム教団体からの嫌がらせ行為を度々受けている。2015年には修道院を訪問した幼稚園バスが襲撃に遭う凶悪事件が起こったが、セルビア領内におけるこうした事件は報道されることがない。コソヴォ領内の正教施設に対して積極的に支援を計画するセルビア政府であるが、逆にコソヴォに隣接するセルビア領内の修道院施設への経済的支援は極めて限定的で、上記修道院では、施設の維持修繕にも苦勞する困窮状態が続いている。コソヴォ独立阻止という政治的目的のためにコソヴォの正教会施設に資金を回すが、自国内の正教会施設に関しては、たとえコソヴォに近く脅威や危険を感じることも多くても資金援助の対象に入れることはない。

しかも、そのセルビア政府からのなけなしの予算も年々減少しており、世界文化遺産でない正教会施設のなかには、維持費用がないために閉鎖状態に追い込まれた例も少なくない。セルビア政府は、政治利用の価値があるコソヴォ領内の文化遺産には継続的に資金を投入するが、国内における文化政策は極めて貧弱で、政策的優先順位は最下位であり、このことがセルビア国内での政治不信を一層高めている。

セルビア文化財研究所は、日本でいう文化庁の役割の一部と国立文化財機構の役割を担っているが、常勤職員は45名しかおらず、これまで継続的に実施してきたワークショップや出版事業は中断、延期に追い込まれ、文化財の保存修復事業も規模を縮小せざるを得なくなった。当然、人材育成も進まないため、コソヴォの文化財保護のための人材派遣も困難となり、コソヴォ領内の文化財保存修復事業は資金・人材・機材を豊富に持つ外国企業へと発注されている。無予算よりはましであるとはいえ、民間資金の導入では、単年度の成果主義が強制され、長期的な修復が実施できないという深刻な問題が生じている。

将来的にコソヴォのユネスコ加盟が認められた場合、コソヴォ領内のセルビア正教の建造物や遺構の管理監督には、コソヴォ政府も関わっていくこととなる。互いに猜疑心を抱き、全面的に対立してきたセルビア政府とコソヴォ自治政府が、セルビア正教会関連の文化遺産の維持保存を共に担っていくのは大きな困難を伴うと予想される。もしもこれらの文化遺産の劣化や過去の破壊がそのまま放置されたり、オリジナルを脅かすほどの大きな改変や過剰な修復が恣意的に加えられたりすることがあれば、文化遺産の真正性や芸術的価値が失われる危険性があり、文化遺産が武力対立の場になった場合、文化遺産そのものが消失してしまう恐れがある。平和維持を目指す意図があったはずのコソヴォのユネスコ加盟事案が、実際には、紛争後に各勢力間でかろうじて保たれてきた均衡を今、崩しかけている。コソヴォの文化遺産保護にとって、この大きな矛盾の解決に国際的な枠組みで取り組むことが急務である。

古くから多民族が行き交い、ローマ帝国、セルビア王国、オスマン帝国、ユーゴスラヴィア連邦など複数の大国に翻弄されてきたコソヴォでは、民族構成も時代とともに変動してきた。コソヴォ問題では、セルビアとアルバニアがそれぞれ歴史上の一期間を切り取って領有権を主張しているほか、それを操る大国や国際機関の存在がある。異なる意図をもった大小の国家、組織が干渉するコソヴォにおける文化遺産保護の問題は、それゆえに難しく、新たな地域紛争の火種をつくりかねない。そのなかで、北欧諸国やオランダ、オーストリアなどの中堅国は、文化遺産の保存修復・活用を目的とした小中規模の援助を継続的に実施し、一定の成果を挙げている。キリスト教、イスラム教のいずれにも属さず、バルカン地域における利害対立に大きな関わりをもたず、一方で世界各地での支援実績を有する日本は、コソヴォにおける文化遺産保護の取り組みにおいて大きなアドバンテージがある。

文化遺産の保護を考えるにあたっては、保存修復作業を実行する以前に、対象物を正確に記録、分析することが極めて重要である。文化遺産に関わる工学、化学、物理、歴史、実技制作など、多様な専門をもつ研究者が揃う日本は、この記録、分析分野で世界でも特に高い評価を得ており、保存修復作業においても高い技術力を誇る。また、アフガニスタンやイラクなど、紛争や政治的混乱のあった地域における文化遺産保護活動、人材育成事業に協力してきた実績をもち、アジアの文化遺産保護活動において常にリーダーシップをとってきた。国家・組織レベルにおいても、個人レベルにおいても、コソヴォ情勢に対して公平な目をもつ日本人が、率先して現地に赴き文

化遺産をめぐる議論，研究を展開していくことで，コソヴォに残されたキリスト教美術を中心とする文化遺産の国際的保護に貢献することができるのではないだろうか。

(ひだか みどり 東京芸術大学大学院美術研究科)